

奄美の島おこしにおける組織づくりの研究

ライブ活動からコミュニティFMへ ※

豊山宗洋

1. はじめに
2. ライブハウス ASIVI の設立
3. 奄美群島日本復帰50周年記念「夜ネヤ」の開催
4. コミュニティFM「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」の開局
5. おわりに

1. はじめに

沖永良部島知名町役場職員で奄美諸島の政治経済史等を研究している前利^{まえとしきよし}潔は、1997年に「日本本土というフィルターを通して奄美をみるのが身についている今日の奄美人から、奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する必要があると思います。奄美は400年に及ぶ薩摩の支配から解かれる必要があります」と述べた（和2005：363）。「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式は、島の識者によってよく指摘されることである。1981年に「奄美を語る会」を発足させた和真^{にぎしんいちろう}一郎も1989年、1990年に2年連続で奄美島唄が民謡日本一になったとき、島出身者が「これで堂々と奄美大島出身者だと言えます」といったことに関して次のように述べている。奄美出身者といえるようになったのは「東京の審査員が奄美のウタを高く評価したから、大賞を取ったから、というにすぎない」（和2005：471）。筆者も、島の長い歴史のなかで培われた奄美人のこの行動様式^{こうどうようしき}の存在を認め、前利の「奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する必要がある」という主張に同意する。しかしながら彼がその後「奄美は400年に及ぶ薩摩の支配から解かれる必要がある」と述べていることについては批判的である。なぜならそこには「本土 vs. 島」という対立の構図を必要以上に煽り立て、島「だけ」で考えていかなければならないという態度をもたらす危険性があるように思うからである。筆者は、奄美人が「奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する」には、逆説的だが「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式を前提にしなければ無理である、という立場に立つ。なぜなら長い歴

※ 本稿は東日本大震災で開催中止となった日本 NPO 学会第13回年次大会（2011年3月19日-20日、日本大学）で「奄美の島おこし運動の新しいかたち ライブ活動からコミュニティFMへ」という表題で発表を予定していた原稿を大幅に加筆修正したものである。なお震災で亡くなられた方に心より哀悼の意を表します。

史のなかで培われてきた行動様式は簡単には変わらないと考えるからである (Bourdieu1977 (=1993):16)。奄美人の「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式を変えようとするなら、その行動様式があることを前提にして、なおかつ時間をかけて地道にそれをおこなわざるをえない。筆者は、奄美大島でコミュニティFMや島唄漫談ユニットなどを通して島おこしをおこなっている 麓 憲吾ふもとけんごや新元一文にいもとかずふみらの活動はまさにこの路線に沿って展開されてきたと考えている。本稿の目的は、彼らのそうした活動のための組織づくりの具体的なあり様を、その成立プロセスに重点をおきながら明らかにしようとするものである。

麓らのミッションを一言でいえば「島人しまんちゅに島人としての誇りを醸成する」ということである。島人という方言はここでは奄美在住者と奄美出身者を指し、その意味では前利のように奄美人という方が適切かもしれない。しかし麓のコミュニティFMはスローガンとして「島ンチュの、島ンチュによる、島ンチュのための島ラジオ」を掲げ、あえて方言を使ってラジオの存在理由を表現している。それゆえミッションに関しては奄美人ではなく島ンチュ(表記は島人)という言葉を用いることにする。また「醸成する」という言葉には、時間のかかる試みであるという意味合いを込めている。次節以降、このミッション実現のための麓らの活動を、ライブハウス ASIVI の設立(アシビ。方言で「遊び」という意味。1998年10月10日設立)、復帰50周年記念「夜ネヤ」の開催(2003年9月14日～15日)、コミュニティFM「あまみエフエム ディ!ウェイヴ」の開局(2007年5月1日開局)という主な出来事に注目して検討していきたい。

分析方法は次のようになっている。麓らの活動のうちライブ活動については酒井正子(2002)、コミュニティFMについては藤田聖二(2007)、金山智子(2008)、隅井孝雄(2008)で簡単な紹介があるが、麓らの活動全般を時間軸も視野に入れてまとめた資料や書籍は存在しない。それゆえ本稿を執筆するにあたっては2010年8月18日に実施した麓と新元からの2時間49分のヒアリングを下敷きにした。しかし彼らの活動はしばしば地元の情報誌等で紹介されており、何よりも彼ら自身が自らの活動をHPやブログでかなりまめに記録している。それゆえ本稿はヒアリングで得た情報のうち極力、情報誌やHPやブログで確認できたものを素材として用いることにした。

2. ライブハウス ASIVI の設立

麓や新元らの活動を時間軸に沿って示したのが表1である。

表中の関連事項には、麓らの活動とかかわりの深いエピックレコードジャパンで、メジャーデビューした島出身のアーティストが示されている¹⁾。

1) 島の価値への気づき

麓は地元で高校を卒業したあとアーティストを志して東京に出ていった。しかし夢破れて

1) それ以外にも多くの奄美出身のミュージシャンはいるが、それについては <http://amaminchu.com/geitassha/top.html> (2011年3月1日ダウンロード) に詳しい。

表1 麓憲吾と新元一文の活動の概観

	麓憲吾	新元一文	関連事項
1995年	東京から帰島		
1998年	10月10日 ロードハウス ASIVI 開業	8月 サーモン&ガーリック誕生	
2001年	2月12日 第1回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		3月10日 元ちとせインディーズデビュー
	11月24日 第2回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		
2002年	1月4日 有限会社アーマイナープロジェクト設立		2月6日 元ちとせメジャーデビュー
	1月27日 「東京夜ネヤ2002」開催（場所：渋谷クアトロ）		
	8月9日 第3回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		
	12月1日 第4回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		
2003年	4月13日 第5回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		
	9月14日 15日 「復帰50周年夜ネヤ」開催（場所：奄美パーク）		
2004年	11月8日 NPO 法人ディ！設立		
2005年	6月26日 第6回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		9月7日 中孝介インディーズデビュー
	7月15日 「夜ネヤ in りゅうゆう館」開催（場所：りゅうゆう館）		
	8月21日 「スカパー！東京ブラージュ2005夜ネヤ」開催（場所：東京代々木）		
2006年			3月1日 中孝介メジャーデビュー
	10月1日 第7回「夜ネヤ」開催（場所：ASIVI）		
2007年	5月1日 あまみエフエム開局		
	11月11日 第7回「夜ネヤ」開催（場所：名瀬公民館）		
2008年	4月13日 「東京夜ネヤ2008」開催（場所：全労済ホール）		6月7日 カサリンチュインディーズデビュー
2009年	7月18日 19日 日食「夜ネヤ」開催（場所：奄美パーク）		
2010年	5月16日 「東京夜ネヤ2010」開催（場所：全労済ホール）		7月28日 カサリンチュインディーズデビュー
2011年	5月1日 サイマルラジオでインターネット放送開始		

帰郷し²⁾、父親の仕事を手伝いながら機会あるごとにライブを企画していた。そのうち集客数が膨らんできて、奄美においてもライブハウスへのニーズが存在することを確認して

2) このあたりの事情に関してはNHK BS1「関口知宏のOnly1（オンリーワン）」（<http://www.nhk.or.jp/only1/>（2011年3月1日ダウンロード））の2010年9月18日の放送に詳しい。

いった。金融機関をいくつか回り、ライブハウスに理解を示したところから融資を受け ASIVI を開業することになった³⁾。それゆえ麓はライブハウスを単なる思いつきで始めたのではなく、自らの実体験にもとづいて始めたのである。その意味ではライブの企画・実施はライブハウス開業のためのいわば地道なニーズ調査だった。

ASIVI では現在、ライブと飲食のサービスを提供しているが、それ以外にも麓自身の学生時代にバンド活動のための場がなかったという経験をもとに、開業当初から高校生バンドにパフォーマンスのための場も与えてきた。高校の教員たちは、当初は生徒の出演に難色を示していたが、規律正しく実施することを約束し、実行したことで、今では両者のあいだに信頼関係が構築されるまでになった。これは、麓の活動が、高校生バンドを通して地域とのつながりをつけていく過程だといえる。このように地域とのつながりを構築していこうとする試みは、麓らの活動にとって特徴的な要素となっている。

ASIVI 開業のころ、麓の頭のなかに島唄を始めとした島の価値への気づきはまだなかった。それに気づいたのは、本土のアーティストとの交流においてであった。奄美にライブハウスという音楽のやれる確かな場所ができたことで、本土から ASIVI にアーティストがやってくるようになった。麓はその接待を兼ねて島を案内するなかで、彼らから島に関する質問を受け、それに答えることができなかった。島唄の価値に気づいたのも、本土のアーティストとの交流のなかであった。彼らは島唄の旋律や裏声の使用について語り、それが他の地域にはない貴重なものであることを教えてくれた。ここで重要なことは、島の価値への気づきが島人である麓のなかから内発的に生じたのではなく、本土のアーティストからの示唆にもとづいて生じたということである。つまり麓自身が、本土のフィルター（この場合は奄美の伝統文化である島唄に価値を見いだすフィルター）を通して奄美をみたことで島唄の価値に気づいたのである。しかしこのとき島唄への視線は、本土のアーティストにとって価値ある側面に限られており（山田2004：131-2）、それを「奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する」行動様式と同一視するわけにはいかない。筆者が麓の活動に注目するのは、彼が本土の人から島唄の価値への気づきを得たのち、島唄だけでなく島の生活、文化へと視野を広め、「島人に島人としての誇りを醸成する」ためには「島の人が島のことを知るべきだ」という発想⁴⁾のもと具体的な活動を開始したからなのである。

新元も麓と同様、島にもともと関心はなかった。彼は現在奄美市役所の職員であり、学生時代にはバントをしていた。新元が島についての無知を自覚したのは、名瀬市（現在の奄美市）の推進していたスポーツアイランド構想⁵⁾の一環としておこなわれた松下通信女子陸上競技部の合宿においてであった。新元は市職員であるから、合宿に来た監督や選手を案内して回り、そのとき選手たちから島のよさを聞かれ、彼はうまく答えることができなかった

3) <http://fumoken.blog68.fc2.com/blog-date-200507.html>、2011年2月3日ダウンロード。

4) 麓は次のように述べている。「私自身は、シマ唄をはじめとする文化や自然、歴史を島の人々が知らなかったことが問題だと感じ、島外へ伝える前に『島の人々が島のことを知るべきだ!』と強く思った」（松浦ら2010：225）。

5) 1992年度から展開され、奄美を日本陸連、実業団、大学などの合宿地として活用してもらおうとするもので、「スポーツアイランド構想」として明文化されたのは1996年3月である（<http://www.city.amami.lg.jp/amami06/amami05.asp>、2011年3月1日ダウンロード）。

（ホライゾン編集部2006：1）。そればかりか熱帯魚等に詳しい監督に「僕がこの島を教えてあげる」といわれる始末だった。新元も麓と同じように、本土の人との交流のなかで、自らの無知を自覚したのであった。新元の場合島唄の価値への気づきは、地元の唄者（島唄の第一人者のこと）である清正 芳計^{せいしょうよしかず}の唄を偶然聞いたことに始まる。清正は地元の権威ある島唄大会・奄美民謡大賞で大賞を受賞した人であるが⁶⁾、新元はそのとき清正がそのような唄者であることを知らなかった。しかし学生時代からバンドをやり音楽的な素養のあった新元は、清正の島唄を聞いて、その音楽的な要素に魅了された。つまり伝統だから価値があるというのではなく、自らの音楽的感性にもとづいて島唄に価値を見いだしたのだった⁷⁾。また新元は、1998年8月に結婚式での余興をきっかけにサーモン&ガーリックという島唄漫談ユニットを作った⁸⁾。そしてこの音楽ユニットが、後々麓の企画するイベントや、学校や集落の行事に積極的に参加し、さらにはCD制作を通して「島人としての誇りを醸成する」ための啓発活動の重要な担い手になる。

新元は清正に誘われて島唄大会を見に行くことになるが、そこにおいて、2006年にポップス歌手としてメジャーデビューすることになる中孝介^{あたりのうすけ}、2005年に日本民謡協会主催の民謡民舞大会で優勝し、翌2006年には日本民謡フェスティバルでグランプリを獲得することになる中村瑞希^{なかむらみずき}などの若い唄者の存在を知った。そして新元は彼らを出演者ならびにスタッフとして、奄美の文化祭的なイベントとしての第1回「夜ネヤ」の開催を企てた。このイベントは、島に関する無知を自覚していた新元が、「島の人が島のことを知るべきだ」と考えていた麓に開催したいと常々言っていたものだった。

2) 島の文化祭的イベント：「夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュ！！」

「夜ネヤ」は正式には「夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュ！！」といい、「今宵は島人に敬意を！」という意味である。まさに麓らの「島人に島人としての誇りを醸成する」というミッションを体現したようなタイトルのイベントである。第1回は、2001年2月12日にライブハウス ASIVI で開催された。イベントでは島唄のほか、舞台上で副業従事者に大島紬を紹介してもらったり、サーファーや釣り人に奄美の海のすばらしさについて語ってもらったりした。当日島唄を披露した中孝介に対しては、サプライズゲストとしてインディーズデビュー直前の元ちとせ^{はじめ}が東京から駆けつけた⁹⁾。さらにプログラムのなかには新元が当時住んでいた宇検村田検集落の青壮年団（青年団＋壮年団）による舞台上での八月踊りという演目も組み込まれていた。これは集落の青壮年団を通じた地域とのつながりの構築だといえ

6) 地元の南海日日新聞社主催の大会であり、その第8回（1987年）で大賞、その前身である奄美新人大会でも第4回に新人賞（大賞に相当する）を受賞している（<http://www.simauta.net/shimauta.html>、2011年3月1日ダウンロード）。

7) 自身の音楽的感性にもとづいて島唄に価値を見いだすという経緯は2011年の奄美民謡大賞で大賞を受賞した前山真吾も同じであった（前山真吾ヒアリング2010年8月20日）。おそらくは麓に島唄の価値を教えた本土アーティストもそうだったのだろう。

8) 本格的なバンドとして活動するときには、サーモン&ガーリック with アニョ（アニョとは方言で「兄さん」という意味で、ベース担当者の愛称である）という名前になり4人構成となる（通常は2人構成）。そのなかでドラムを担当しているのは麓である。

9) なぜサプライズゲストかということ、中は、1996年の島唄大会において当時最年少で大賞を受賞した元ちとせにあこがれて島唄を始めたからである。

る。

第1回、第2回の「夜ネヤ」のあと2002年1月27日に、麓らは「夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュッ！！ IN TOKYO」(以下「東京夜ネヤ2002」)を渋谷クアトロで開催した。このイベントは島のライブハウス ASIVIでおこなうような文化祭的なものではなく、音楽的色彩の強いイベントであり、目的は「本土の人に奄美をPRすることではなく、東京にいる奄美出身者を集め彼らを元気づける」ことだった。なぜ元気づける必要があったのか。麓は次のようにいっている。「中央メディアから流れてくる情報により、新しい物事が魅力的で正しく、地元の古い物事が間違っているという内地への憧れとともに私たちは『奄美』に対して誇りが持てず、また気付くことができず、地方・離島のコンプレックスが生まれた。私自身20年前高校卒業後、上京し出身地を聞かれても『九州』『鹿児島』とそれ以上は答えなかった。周りの出身者も同じ状況だった」(松浦ら2010:224)。こうした状況解釈にもとづき(ただし上記の指摘は他の人びとによってもなされている¹⁰⁾、麓は島を飛び出して「東京夜ネヤ2002」を開催したのである。したがってこのイベントは「島人に島人としての誇りを醸成する」という彼らのミッションに沿うものであり、対象が島在住者ではなく島出身者と変わってはいるが、その点でぶれはない。ただしこのとき島出身者のすべてが麓の指摘するような体験をしているわけでないことは注意しておかねばならない¹¹⁾。現実には、そうした体験をしている人もいれば、していない人もいる。しかし社会運動の理論が教えるのは、人びとが動き出すにあたって、彼らが現実をどのように見て、どのように解釈するかという解釈図式(フレーム)が1つの重要な役割を果たすということである(Crossley2002 (=2009)326-8)。麓は本土の島出身者の現実を「元気づけなければならないもの」というふうに解釈し、また実際に動いたのである。そして「東京夜ネヤ2002」が盛況のうちに終わったということは、彼のもつ解釈図式が人びとからの共鳴を得るものだったことを示している。

「島人に島人としての誇りを醸成する」ためには「島の人が島のことを知るべきだ」ということで開催した「東京夜ネヤ2002」のなかで、麓らが自らのミッションの実現を短期的に実現しようとしていない、いいかえればまさに「醸成する」というスタンスにあることを示す1つのエピソードがある。

「東京夜ネヤ2002」は音楽的色彩の強いイベントであるから、目的合理的な発想に従えば「島出身者が島唄を聞いて島のよさを実感し、そのことを通して島人としての誇りをもたらし」というところに重点がおかれるはずである。もちろんそういった発想がなかったわけではないが、麓らは当日来場する島出身者たちは、唄を聞きに来るといよりも集まりそのものを楽しみに来るといことも予測していた。それゆえ彼らは会場の渋谷クアトロに焼酎用の氷を十分に用意しておくことを要請していた。が、始まってみると営業時間中に氷のス

10) 仙田2005:224、227、前利ら2005:364、屋宮2006:58、中西2007:69。

11) 島出身者である筆者自身そうである。また2010年8月、2011年8月に奄美大島でヒアリングをおこなった際、本土在住経験のある数名の人に麓や彼の周囲の出身者が体験したような経験があるかどうかを質問したが、そのような体験をしている人はいなかった。しかしだからといって「そのような体験は思い込みである」とするのも誤りであろう。これに関して「どんな事象も、歴史的に見ること、多くの事例から検討すること、私という一人称や、ひとつの事例で問題のすべてを語らないことが肝要である」(角岡2005:93)という角岡伸彦の指摘は肝に銘じておかなければならない。

トックが切れてしまった。いうまでもなく来場者が会場の見込み以上に焼酎を飲み、酔い、語らったのである。この「集まって飲み、語らう」ことで島人としての誇りが実際に生じる保証はないだろう。しかしながら麓らには「それでもよい」という発想があるように思える。つまり「島人に島人としての誇りを生じさせる」という目的をもってイベントを企画し、そうなることを願いながらも、必ずしもそうならなくてもいいとするオープンエンドな性格、筆者はこれが、彼らの活動が多くの人びとを引きつける1つの大きな魅力だと考えている。

3. 奄美群島日本復帰50周年記念「夜ネヤ」の開催

1) 地域青年団と元ちとせ

2002年10月10日に有限会社アーマイナープロジェクトが法人登録され、ライブハウスASIVIは同社の事業の1つとなった。2003年9月14日～15日には奄美群島日本復帰50周年記念「夜ネヤ、島ンチュ、リスペクチュッ!!」(以下「復帰50周年夜ネヤ」)が開催された。主催は奄美群島青年団連絡協議会、企画制作および事務局はアーマイナープロジェクトであった。約5000人の入場者を予定していたこの大規模なイベントのために、麓らは1年かけて準備をし、奄美群島のすべての島々(奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島)を回って青年団に協力を依頼した。青年団によって反応はさまざまだったが、当日多くの青年団のテントが会場である奄美パークに立ち並び、200人くらいがボランティアとして来てくれた。これは、群島全体の青年団を通して地域とのつながりを構築する試みだといえる。

この「復帰50周年夜ネヤ」には、元ちとせのようなメジャーな島出身のアーティストたちも参加した。彼女は島出身のJポップ歌手として、2002年2月6日にエピックレコードから「ワダツミの木」でメジャーデビューし、大ヒットした。元は1996年の島唄大会・奄美民謡大賞において当時最年少で大賞を受賞したほどの唄者であり、「ワダツミの木」にはその島唄のテイストがとりいれられていた。このときエピックレコードの当時の担当者はシングルをヒットさせようとして、つまり企業の論理で島唄のテイストをとりいれたのだが¹²⁾、全国的にヒットした歌に島唄のテイストがとりいれられていたという事実は、「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式をもつ奄美の人にとって大きな意味をもった。すなわち「本土の多くの人びとが島唄(正確には島唄のテイスト)を評価した」ということが、島の多くの人にとって伝統文化への視線を生じさせたからである¹³⁾。南海日日新聞社の

12) <http://www.sonymusic.co.jp/sd/mailmagazine/mag25.html>、2011年1月26日ダウンロード。この文脈で企業の論理と書くと、何やら悪いことのように受け取られる恐れがあるので付記しておくが、経済学は一般に、企業が利潤を求めて行動することを前提する。それは、企業の利潤追求行動が結果的に社会全体を豊かにすると考えるからである。実際エピックレコードの企業行動は、奄美にとって大きな貢献をしたのである。大切なことは「よい意図でやったことはよい結果をもたらす、悪い意図でやったことは悪い結果をもたらす」と単純に考えないことである(もっとも企業の利潤追求行動は決して「悪い意図」ではないのだが)。

13) 本稿冒頭で奄美出身者が民謡日本一になったことは述べた。これも島唄という伝統文化の価値への視線を生じさせたが、それは一部の人に限られていた。

前里純隆提供のデータによれば、元のシングルが大ヒットした翌年の2003年には島唄大会・奄美民謡大賞の出場者は、130名から171名に増え（増加率31.5%）、とくにそれは14歳以下の少年部門（33名から53名で増加率60.6%）と15歳以上39歳以下の青年部門（23名から36名で増加率56.5%）において著しかった。だが、こうして生まれた伝統文化への視線も、「ワダツミの木」のヒットに続く動きがなければ一過性のブームに終わる恐れがあった。実際、奄美民謡大賞の少年部門の出場者は2005年には54名から43名に11名も減少している（減少率20.1%）。ただ全体としては2004年の185名から189名になり、2009年には特殊要因はあるが244名にもなっているから¹⁴⁾、これまでのところブームで終わっていないといえることができるだろう。このような展開には、元ちとせやエピックレコード、奄美行政¹⁵⁾などの努力のほかに、麓らの活動も大きく寄与している。また地域青年団が、元ちとせのようなメジャーなアーティストと同じ出演者として参加することは、当の本人たちの自己評価、地域の人びとの青年団評価を（少なくとも一時的には）高めることになった¹⁶⁾。

2) 「復帰50周年夜ネヤ」とNPO法人ディ！の設立

「復帰50周年夜ネヤ」は大盛況のうちに終わるが、麓はその事業で大きな借金を負った¹⁷⁾。しかしそれと引き換えに、大規模なイベントをやったことでより多くの人びとに彼らのやりたいことが周知されていった。ライブハウスという閉じた空間をでて、野外というより大きな空間、なおかつ復帰50周年記念行事の一環として活動したことが、このことを可能にした。しかし同じころ麓は、元ちとせの活躍で、奄美が、自分たちの伝達できる範囲をはるかに越えて周知されていくのを感じていた。メディアの力を実感したわけである。そこで彼は自分たちのミッションをより多くの人びとに伝えるためにはどうすればよいか考え、思いついたのがコミュニティFMだった。

一方「復帰50周年夜ネヤ」のあと、麓に対して、一部で、イベント開催は彼の売名行為にすぎないという批判が生じた。主催こそ奄美群島青年団連絡協議会であったが、企画制作および事務局は麓の有限会社アーマイナープロジェクトだったからだった。それゆえ麓は、コミュニティFMを運営するには従来の方式ではだめで、他の人から理解と協力の得られる体制を整える必要があると考えた。そして2004年10月28日に設立したのがNPO法人ディ！だった¹⁸⁾。しかしラジオは麓にとってはまったく未知の世界だったため、何から手をつければよいかかわらず、ラジオ事業はなかなか進展しなかった。ただNPO法人ディ！は、ディ！レコードで地元アーティストのCD制作や、年1度の大浜サマーフェスティバルの開催なども事業としていた。CDに関しては2005年9月7日に中孝介「マテリア」、2005年12月24日に新元を中心とする島唄漫談ユニットであるサーモン&ガーリックの「ハブマンショー」とい

14) 特殊要因とは、この年から予選大会が東京、関西、鹿児島、喜界島、徳之島、そして大島本島の6カ所でおこなわれるようになったということである。

15) イベント開催などの活動のほかに、目立ったところでは奄美市役所職員による「濱田洋一郎と商工水産ズ」という音楽ユニットの活動をあげることができる（奄美市役所職員の濱田洋一郎、當田栄仁への2010年8月19日ヒアリング）。

16) 新元一文への2010年8月18日ヒアリング。

17) 物語風ではあるが、この出来事については屋宮久光（2006）に詳しい（屋宮2006：117-32）。

18) 「ディ」とは方言で「さあ、やろう」の「さあ」に相当する呼びかけの間投詞である。

うCDを発売した（その後、ディ！レコードは有限会社アーマイナープロジェクトに移管され、2011年9月24日現在でCDを7つ制作している）。「ハブマンショー」では彼らのオリジナル曲のほかに運動会の様子、八月踊り、結婚式での余興の様子といった集落の日常生活でいかにもありそうなやりとりが、方言を交えて面白おかしく表現されている。たとえフィクションであっても、そういった雰囲気やCDを通して再現することで「島の人が島のことを知る」あるいは「感じる」ことを彼らは期待しているのである。先に麓は本土アーティストから島唄の価値への気づきを得て、その後関心を島の生活、文化に広げていったということを書いたが、「ハブマンショー」といったCDのなかに彼らの伝えたいメッセージの一端が含まれているように思う。それは「逃げ出そうと思えば逃げ出せないことはないのに、集落のなかにとどまり、行事の段取りや実施などの集落活動（集落サバクリ^{さばくり}）という）を担っている人は格好いい」というメッセージである¹⁹⁾。この「格好いい」という言葉をどう解釈するかについて筆者はまだ確たる答えをもっているわけではないが、そのなかに「大事な何かを守っている」という意味合いがあること、そしてそれが「島人としての誇り」に通じる「何か」であることは想像がつく²⁰⁾。この「何か」を知らせ、感じさせるために麓らはCDを制作し、コミュニティFMで放送をおこなっているのである。

4. コミュニティFM「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」の開局

1) コミュニティFMの開局前夜と放送のコンテンツ

麓にとって、ラジオは未知の世界であったため、なかなか具体的な動きに着手することができなかった。しかし2005年にたまたまライブハウスASIVIの入る建物の2階のスペースが空くことになり、彼は一念発起してコミュニティFM設立に向けた動きを始めることになった。

麓は当初、コミュニティFMのサポーター会員は、FM開局後に放送を通じて募集しようと思っていた。しかし日本で最初のNPO型のコミュニティFM「京都三条ラジオカフェ」の発起人・大山^{いっごう}一行が開発した開局方式は、まずコミュニティFMを支えたいと思う地域の人や団体を会員というかたちで募集し、その人たちに費用を負担してもらって立ち上げるという方式であったため（村上ら2007：20-1）、申請の段階で総務省から「開局後の地元の広告予約」や「サポーター会員名簿」などを要求された。麓は、自分でも本当に開局できるか自信がなかったため、事前の募集活動をすることに気乗りがしなかった。それでも地元のボランティアや企業団体の集まりでPRをおこなったり、商店街秋祭りなどでイベント・ミニFMを企画したり、奄美テレビ（ケーブルテレビ放送局）の協力のもとPR番組を制作して放映したりすることを通してサポーター会員を集めていった。地元のデカウント・スーパーは、地元紙の『南海日日新聞』に麓のコミュニティFMのために一面広告を出してくれた。このように多くの個人や団体の支援を得て2007年5月1日にコミュニティFM「あまみ

19) 麓憲吾、新元一文への2010年8月18日ヒアリング。

20) その「何か」も筆者はまだうまく表現できない。集落の伝統とでもいえば一応いいのだろうが、しかしそうしたありきたりな言葉では尽くせないもの、そういった「何か」があると思う。

エフエム「ディ！ウェイヴ」は開局したのである。これらの支援を麓が得ることができたのは、彼が ASIVI 開業以来地域とのつながりを地道に構築し、「復帰50周年夜ネヤ」等のイベントで実績をあげていたからであった。コミュニティFMの開局で麓らは「島人に島人としての誇りを醸成する」というミッション実現のために、これまでのイベント的な広報手段にくわえて、ラジオという日常的な広報手段を獲得したことになる。また2011年4月までは周波数20Wで放送し可聴エリアも限られていたが、5月1日からはサイマルラジオ²¹⁾にてインターネット放送を開始し、可聴エリアは全世界に広がることになった(隅井2008:38)。

このとき麓らのミッションの実現のためには、放送のコンテンツが重要となる。そこで番組表²²⁾に目をやれば毎日6時から7時まで「シマ唄・新民謡」(シマ唄とシマをカタカナで表記する場合、それはアイランドとしての島ではなく集落のことを指している)月曜から土曜日の7時から7時30分までは「区長さんのゴミ出し情報/奄美市便り/警察情報」、7時30分から9時まで「スカンマーワイド!」という番組で「本日の朝刊から」「Weather Report」「お悔やみのご案内」「ナキャワキャ島自慢 or 島の宝奄美っ子」といったコーナーが設けられている²³⁾。島関連アーティスト番組も「中孝介 拝みレディオ」「元ちとせの Do you know me?」など8番組、住民参加番組も「月曜文学散歩」「あの日・あの頃～アメリカ軍政下・行政分離期の奄美を語る～」など8番組が組まれている。また2010年10月20日の奄美豪雨災害では奄美市との災害協定をもとに24時間態勢で災害情報を提供したりもした²⁴⁾。村上圭子らの2006年のコミュニティFM調査によれば、回答150社がコミュニティFMの最も重要な機能として「災害時のきめ細かい情報提供」(38.0%)、「地域の人達の住民発信のサポート」(34.7%)、「地域住民の交流の拠点」(8.7%)、「地域文化の継承・育成」(5.3%)をあげていた(村上ら2007:2-3)。「島人に島人としての誇りを醸成する」という麓らのミッションに関しては後の3つが重要であるが、それだけでなく他の放送局と同様に災害情報の提供にも尽力しているのである。

番組表をさらに見れば毎日20時くらいから24時のあいだで「島アーティスト」の文字が目につく。そこでは島唄や島出身アーティストの歌が流されるが、そのようなことができることを利用して麓はこれまでにないかたちで島出身アーティストのカサリンチュ²⁵⁾を2010年7月28日にメジャーデビューさせることに成功した。元ちとせ(2002年メジャーデビュー)も中孝介(2006年メジャーデビュー)もメジャーにはなったが、2人はいずれも本土で売れて、その後奄美で売れるというパターンであった。その意味では奄美の人は「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式に従来通り従っていることになる。この行動様式がなかなか変わらないというのは筆者の基本的な立場であるが、それでも2007年にコミュニティFMが開局したことで、音楽に関して「島で評価されたものが本土で評価される」とい

21) 音楽を使う番組は著作権の関係でインターネットにのせられなかったが、2008年5月に「コミュニティ・サイマルラジオ・アライアンス」という組織が作られ、音楽著作権協会など権利者団体との協議が整ったのでインターネット放送ができるようになった(隅井2008:38)。

22) <http://www.npo-d.org/img/timetable201107.jpg> 2011年9月24日ダウンロード。

23) 方言の「スカンマー」とは「朝」、「ナキャワキャ」とは「あなたたち、私たち」という意味である。

24) ウィキペディア「ディ!」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%82%A3>) 2011年9月24日ダウンロード。

25) 奄美大島の北部に奄美市笠利という地域があり、方言で「笠利の人」という意味である。

うパターンを作ることができるようになった。このときカサリンチュのメジャーデビューには、コミュニティFMの開局だけでなく、麓らがこれまでに築き上げてきたその他の要素も大きく寄与している。まずカサリンチュの2人組はもともと、ライブハウス ASIVI のおこなっている高校生イベントの出身である。2008年6月7日に「カサリンチュ」というCDでインディーズデビューしたが、それを制作したのは有限会社アーマイナープロジェクトのディ！レコードだった。新元は、島唄漫談ユニット・サーモン&ガーリックの活動のなかでカサリンチュを広報し、ディ！ウェイブは先に示唆したように彼らの歌を流すことで島内に支持基盤を作った。そして2010年7月にエピックレコードからメジャーデビューすることになったのである。筆者は人びとの変わりにくい行動様式は短期的にそれと違う動きができて、しばらくするとまたもとの状態に戻らせてしまう強力な力があると考えているので、今後このパターンが広がっていくかどうかはわからない。だが、10年以上にわたる継続的な取り組みのなかで麓らが音楽、ひいては島の文化に関して「島で評価されたものが本土で評価される」というパターンを広げることのできる組織づくりに成功したということは評価に値する。

2) 社会運動としてのコミュニティFM？

最後に麓らのこのような活動が社会全体にとってどのような意義をもつのかを、コミュニティFMに関する松浦さと子・川島隆編（2010）の議論に関連づけて検討しておこう。松浦さと子は、コミュニティメディアを非営利セクターとして捉えながら²⁶⁾、コミュニティメディアの制度化を実現した海外の事例を検討した結果として次のように述べている。海外から学ぶべきは「非営利セクターが社会運動の担い手としての自覚をもち、行政が対処しきれない社会問題の解決能力をアピールし、自ら望ましい制度を提案し、政策決定を行う政府や規制機関と交渉し、政策における自らの居場所を確保するために声をあげることの重要性である」（松浦ら2010：255-6）。確かにコミュニティメディアを社会のあり方を変革していく社会運動の担い手として捉えることは重要であり、筆者も今後この領域でのコミュニティメディアの役割を期待している。しかしながら麓らの活動を検討してきて、こうした規定に若干の違和感ももっている。それは筆者だけの感覚ではなく、松浦も現場の人たちから「そもそも自らの活動を『社会運動』としてくられることに違和感があるという声も聞いた」と述べている（松浦ら2010：256）²⁷⁾。これは、松浦がコミュニティメディアや非営利セクターについてマクロ的な視野に立ち、コミュニティメディアの現場の人たちがミクロ的な視野に立っているということからくるギャップかもしれない。ただこのとき松浦の主張は、海

26) ただしコミュニティFMにおける市民参加はNPO法人のコミュニティFMも株式会社のコミュニティFMも同じようにおこなっており、その形態に関して営利・非営利の区別は関係ないという指摘もある（坂田2007：161）。

27) ただし松浦はこの記述のあとに社会運動の定義を「私たちが生きるこの日常世界で、自分と他人がより生きやすくなるよう絶えず努力を続けること」としている（松浦ら2010：256）。これはメルッチ（Melucci1989（=1997）78）による社会運動の潜在的な側面に相当し、特定のフレームのもとでは筆者もまったく同意見である。しかしここでは現場の人に違和感が生じたという事実には焦点を当てている。彼らは「政府や規制機関などに働きかけるもの」、つまりメルッチによる社会運動の顕在的な側面に焦点を当てて社会運動という言葉を理解したのである。松浦の規定をみて筆者が違和感をもったとき、筆者も現場の人と同じように社会運動を捉えていたのである。そしてここでの筆者の議論は、そうした社会運動の捉え方を前提にして進めている。

外の事例が多分に反映されており、その意味ではわが国のコミュニティメディアにとって今後の1つの方向を指し示す理念的な性格のものだといえるだろう。なぜなら前項で見たように、村上圭子らの2006年のコミュニティFM調査では、日本のコミュニティFM放送局が最も重要な機能としてあげていたのが「災害時のきめ細かい情報提供」(38.0%)、「地域の人達の住民発信のサポート」(34.7%)だったからである(村上ら2007:2-3)。2009年に世界コミュニティラジオ放送連盟(AMARC)の幹部らが来日した際におこなったトークセッションでも、海外の事例をもとにコミュニティFMが貧困者や迫害者などの「少数者の声を社会につなぐ」というコミュニティFMの一側面が強調されたことに対し、『ミッションは各局それぞれ』という反発も起こったという指摘がなされている(松浦ら2010:258)。この反発は、麓らの活動を検討してきた筆者が「コミュニティメディアは社会運動の担い手」という規定をみたときに抱いた違和感と通じるものである。たとえば奄美の人を「少数者」と捉えて「少数者の声を社会につなぐ」といっても、ディ!ウェイヴが対象としているエリア(社会)では、奄美の人は決して「少数者」ではない。それゆえ「ミッションは各局それぞれ」という主張はやはり尊重すべきだろう。各局はそれぞれのミッションをもち、またそれを1つのエネルギー源として活動している。そしてそうしたコミュニティメディアのなかからは「社会運動の担い手」に変化するものもあれば、地域情報の発信にとどまり続けるものも出てくるだろう。この多様性はまず認めなければならないものである。しかし一方で番組編成の問題、資金調達の問題など、多くのコミュニティメディアに共通する問題もあるし、活動を継続するなかでミッションが変わってくるところもあるかもしれない。それゆえ個々のコミュニティメディアが自らの関心に合わせてつながっていけるようなネットワークの存在はやはり重要になる。ただその場合、このようにつながりや集まりに、たとえば「コミュニティメディアは少数者の声を社会に伝えるものである」という一定のフレームを与えて、個々のコミュニティメディアの行動を拘束しては、大切な活動のエネルギーを枯渇させてしまうことにもなりかねない。もし仮に一定のフレームを与えざるをえないとしたら、麓らの「東京夜ネヤ2002」の活動のところで指摘したように、「少数者の声を社会に伝えるのがコミュニティメディアであるが、必ずしもそうならなくていい」というオープンエンドな性格をもったつながりにすることが必要であるように思える。

5. おわりに

ここまで「島人に島人としての誇りを醸成する」というミッションを実現するための組織づくり(あるいは個別組織を超えてシステムづくりといってもいいかもしれない)の歩みを具体的にみてきた。彼らは奄美人の「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式に自ら影響されたり、あるいはイベント等ではそれをうまく利用しながら、組織づくりを進めてきた。これまでみてきたように、こうした組織づくりは一朝一夕に実現されたわけではなく、1つのミッションをぶれずに掲げ、継続的な取り組みをすることで可能になった。本稿で指摘した重要な事項をキーワード的に示せば次のようになる。ライブハウス ASIVI 設立に先立つニーズ調査、設立後の高校生イベントを通じた地域とのつながりの構築、サー

モン＆ガーリックという啓発活動の担い手の形成、「夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュ!!」というイベントの開催、そうしたイベントにみる活動のオープンエンドな性格、群島全体の青年団を通じた地域とのつながりの構築、元ちとせの出現とメディアの力の認識、NPO法人ディ!によるCD「ハブマンショー」の制作、それを通じた集落の生活再現の試み、コミュニティFM設立時の周囲の人びとの支援とそれを可能にしたこれまでの彼らの頑張り、サイマルラジオによるインターネット放送開始にみる常に新しい動きへの対応、ラジオを通じた住民とのつながりの構築、カサリンチュのメジャーデビューのときに証明されたこれまでに蓄積された彼らの試みの有意義性である。まさに一步一步、地歩を固めてきたという感じである。

麓らのこれらの努力をもってしても、多くの島人が「奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する」というところにいくまでは、多くの時間を要するだろう。「島を遅れたもの」とみなす「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式は現在も働いているし、いつまた麓らの活動を飲み込んでしまうか、わからない。それに抗するためにも麓らは「島人に島人としての誇りを醸成する」というミッションを掲げながら、現在の状態に安住することなく前に進まなければならない。

謝 辞

本稿作成にあたって麓憲吾氏、新元一文氏、前山真吾氏、平田宏尚氏、前里純隆氏、濱田洋一郎氏、當田栄仁氏にお世話になりました。ここに記して感謝いたします。

なお本稿は平成22-23年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所プロジェクト「奄美のしまうたによる島おこしの担い手形成に関する研究」の成果です。

付 記

2012年3月末をもって筆者の恩師である鹿児島大学法文学部経済情報学科教授の山田誠先生が定年退職なされることになりました。学部の頃はもとより、就職後研究者として悩む筆者を先生は1996年に2ヵ月間ドイツに連れて行ってくださり、今回も奄美出身の筆者を奄美の研究に導いてくださいました。先生の学恩に心より感謝しますとともに、拙いものではありませんが、本稿を山田先生に捧げたく思います。

参考文献

- 1) Bourdieu, P (1977) *ALGERIE60-structures économiques et structures temporelles*, 原山哲訳 (=1993) 『資本主義のハビトゥス - アルジェリアの矛盾』藤原書店。
- 2) Crossley, N (2002) *Making Sense of Social Movements*, Open University Press, 西原和久・郭基煥・阿部純一郎訳 (=2009) 『社会運動とは何か 理論の源流から反グローバリズム運動まで』新泉社。
- 3) 藤田聖二 (2007) 「コミュニティFMと地域づくり」鹿児島地域経済研究所 『地域経済情報』

207、6-9。

- 4) ホライゾン編集部(2005)『奄美の情熱情報誌 ホライゾン』21。
- 5) ホライゾン編集部(2006)『奄美の情熱情報誌 ホライゾン』24。
- 6) 角岡伸彦(2005)『はじめての部落問題』文春新書。
- 7) 金山智子(2008)「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達-奄美大島編」『Journal of Global Media Studies』(駒澤大学)3、1-20。
- 8) 松浦さと子・川島隆編著『コミュニティメディアの未来 新しい声を伝える経路』晃洋書房。
- 9) Melucchi, A (1989) *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia Temple University Press. 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳(=1997)『現在に生きる遊牧民』岩波書店。
- 10) 村上圭子・鈴木祐司(2007)「「地域社会」と「メディア」の実験 15年目を迎えたコミュニティFM」『NHK放送研究と調査』57(3) 2-23。
- 11) 中西雄二(2007)「奄美出身者の定着過程と同郷者ネットワーク 戦前期の神戸における同郷団体を事例として」『人文地理』59(2) 62-77。
- 12) 和真一原著(奄美を語る会編)(2005)『奄美ほこらしや』南方新社。
- 13) 屋宮久光(2006)『南の島のたったひとりの会計士』扶桑社。
- 14) 酒井正子(2002)「奄美島唄の現在」『ユリイカ』34(10) 140-3。
- 15) 坂田謙司(2007)「研究ノート コミュニティFMを巡る研究視点の再整理 営利・非営利を超えた議論活性化のための一考察」『立命館産業社会論集』42(4) 155-63。
- 16) 仙田隆宜(2005)「『奄美を語る会』が語ってきたもの 『語る会』から見た鹿児島と奄美の社会」鹿児島県地方自治研究所編『奄美戦後史 揺れる奄美、変容の諸相』南方新社、221-44。
- 17) 隅井孝雄(2008)「コミュニティFMの地域力、京都三条ラジオカフェの経験から、その現状と課題を考える」『aura』192、34-9。
- 18) 前利潔・平井一臣・桑原季雄・ほか(2005)「《座談会》開発の政治と復帰運動」鹿児島県地方自治研究所編『奄美戦後史 揺れる奄美、変容の諸相』南方新社、351-71。
- 19) 山田誠(2004)「南西諸島の経済振興策と経済学アプローチ」(鹿児島大学)地域政策科学研究」1、113-37。
- 20) 山田誠(2009)「奄美のシマウタと経済社会の変容-現代地域政策における「文化の力」の射程」『経済学論集(鹿児島大学)』72、1-50。